

瀧澤・バルト・トマス¹⁾

片 山 寛

1. はじめに

「等石忌」の記念講演会でお話しをすることをお引き受けして、大胆にも上記のような題をつけたのですが、ここで私がお話しをいたします内容は、瀧澤克己先生、カール・バルト、そしてトマス・アクィナスという三人の思想家のそれぞれについて、トータルに評価したり位置づけたりするものではありません。正直に言って、私にはその力はないと思います。三人の哲学あるいは神学というものを、自分が正しく理解したかどうか、怪しいものだと思います。ただ私は、自分の研究者としてのまた牧師としての拙い歩みの中で、この三人の思想の間で揺れ動いてきた経験がありますので、その経験をお話しするに過ぎないのです。つまり私は、自分という小さな器の中に映じた限りでの瀧澤、バルト、トマスについてお話をいたします。

誰が話しても、結局は自分に理解できた限りで話すしかないのだから、同じことだ、と言われるかもしれませんが、そうではないのです。といいますのは、私がここでお話ししようとしております主題は、実を言うと、瀧澤先生の思想でもバルトでもトマスでもなくて、この三人の思想家がそれぞれ問題にし、問題にしつづけたもの、すなわちキリスト教というものだからです。キリスト教とは何であるのか、その問題とは何か。それを私はここでいくらかでも考えてみたいのです。

その意味では、私のお話は、瀧澤、バルト、トマスについて私よりももっ

1) この小論は、2004年6月26日、瀧澤克己先生の没後21回忌の「等石忌」の記念講演会で行った講演である。

と深くもっと詳しく研究してこられた皆様には、それぞれについて大きな不満を抱かせるものになるかもしれません。それらの御指摘は後でご教示いただけるものとして、しかし私としては、自らの貧しさのゆえにそうするしかないこと、つまり自分がなぜ瀧澤からバルトへ、そしてさらにバルトからトマスへと歩みを進めることになったかをお話ししたいと思います。

2. 瀧澤先生との出会い

私が瀧澤克己先生に出会ったのは、1980年であったと思います。それは同時に、カール・バルトの神学との出会いでもありました。その前の年、私は西南学院大学神学部に入學して、最初は語学や聖書時代の歴史学が中心だったのですが、2年目から寺園喜基先生を通じてバルトの『教会教義学』を学び始めました。ところがこの「20世紀最大の神学者」と呼ばれる人の思想が、私にはよく理解できませんでした。翻訳のまずさもあったと思いますが、やたら大仰なだけで、鋭くこちらの内面に響いてくる言葉に乏しいように思えたのです。何がバルト神学の中心で、何が周辺であるかもわかりませんでした。ただただ抽象的な言葉が空回りしているだけのように思えて、私はある日、寺園先生の授業の中で、失礼も省みず、次のような質問をいたしました。

「自分には、バルトの言葉は全然響いて来ません。何で彼はこんな回りくどい言い方をするのでしょうか。」

その時の寺園先生のお答えは、私が一生涯、たぶん忘れられないものになるだろうと思います。先生は、こうお答えになったのです。

「それは、君がのほほんと生きているからだ。」

私は残念で、また先生が自分の問いを理解してくださらないのが悔しくて、長い間悩みました。バルトの神学をどうしたら理解できるのか、考えあぐねていたときに手にとったのが、瀧澤先生の『カール・バルト研究』だったのです。私はそれを、創言社の版で古書店で見つけて読みました。そして、非常に爽快な感じを伴いつつ、バルト神学の根本的な動機を理解したような感じを持ったのです。

つまり私は、瀧澤先生を通じて、しかも瀧澤先生のバルト神学に対する問いかけを通じて、初めてバルトに触れたような気がしたのです。バルト神学の中心は、イエス・キリストというひとつの名前だということ、繰り返しバルトはこの不思議な名前に接近し、そこから学び、また問いかけを続けているということ、いわば世界のすべてについての答えを、彼はこの名前から得ようとしているということです。

単純化して言うならば、バルトの基本的な主張とは、神様とはイエス・キリストだ、ということなのです。神様の概念が先にあるのではない。イエス・キリストという、歴史の中を歩んだ一人の人がいた。このキリスト、それは神の完全な現われであって、その意味で「神の啓示」*Offenbarung Gottes* と呼ばれます。神の啓示はイエス・キリストである。それ以外のところに神はいない。

そして私はそこから、寺園先生がバルトについて言っておられることも、すこしずつからだ糸が解きほぐれるように理解し始めました。そして特に私にとって驚きだったのは、バルト自身は瀧澤先生の批判を決して受け入れなかったということでした。

瀧澤先生のバルトに対する問いかけは、有名なものですので、皆さん御存知だと思います。すなわち瀧澤先生は、バルト神学の中心を、「イエス・キリストの発見」ということに見ておられます。しかもそれは、「インマヌエルの原事実の発見」だったということです。いちいちの人、それが人であるかぎり全ての人のもとに、「神われらと共にあり」という根源的な事実がある。その事実が目ざめ、その事実にもとづいて生きることこそ、すべての人間的な自由の原点なのだ、ということです。「自由」というと、私たちは何か、何者にも支配されない、何も彼を制約するものがない、無制限な状態を想像しますけれども、ただこのインマヌエルという根源的な規定性だけは、寸毫も変えることができない。なぜなら、この規定性に基づいてこそ、自由というものは存在するからです。「もはやわれ生くるにあらず、キリストわが内にて生くるなり」(Gal. 2, 20)という聖書の言葉がありますが、私のうちにこのキリストという名で呼ばれる事実がある。その一番根源的な事実を

私たちが否定するならば、私たちはその「倒錯」の結果として、どうしても不自由に陥らざるをえない。なぜなら第一義のものをないがしろにしておいて、二義的・三義的なものに執着すること、その無秩序 inordinatio²⁾こそ、私たちが「罪」と呼んでいるものに他ならないからです。

そして瀧澤先生は、キリスト教というものが、その最高の成果であるバルト神学でさえも、その一番中心にある微妙なところで、この第一義のインマヌエル、つまり事実そのものとしてのインマヌエルと、その第二義的な形態であるナザレのイエスという歴史的な人格とを混同している、と批判されるのです。それはもとより、カール・バルトという人が実際の政治的・社会的な判断において、この混同の結果として誤りを犯している、という意味ではありません。バルト自身は実際にはそのような倒錯を犯していなかったし、キリスト教を他の宗教に対して絶対化したり、ナチズムのような頽廢し転倒した自由主義に対して、ほんのわずかにでも認めるといふことはありませんでした。しかし、この第一義と第二義のインマヌエルの混同の結果として、バルトは、たとえば歴史のイエスを相対化する恐れのあるいわゆる史的イエスの研究に対しては、門戸を閉ざしてしまった、と瀧澤先生はお考えでした。

3. 瀧澤からバルトへ

神学部を出て牧師になる頃に、私は自分の中でひとつの決断をしなければならぬと思いました。それは瀧澤をとるかバルトをとるか、という問題であり、キリスト者としては、聖書の歴史的・批判的な研究を中心にして聖書を学ぶのか、それともバルトの教義学的な神学によって聖書を学ぶのか、という問題でした。それは本当は二者択一の問題ではないかもしれませんが、限りある自分の力で学びをすすめてゆくとすれば、とりあえずはどちらかの方法を中心にせざるをえませんでした。

私は神学部の卒業論文の主題として、寺園先生に教えをいただきながら、ルドルフ・ブルトマンとバルトの神学を比較検討するということにして、そ

の両者を「説教」にいたる道筋の問題としてとりあげて論文を書き、聖書学の青野太潮先生に提出したのです。それは『聖書解釈と説教』という題の、原稿用紙で100枚ほどの論文でした。この主題を決めたときからすでに予感のようなものはあったのですが、私は結局、瀧澤ではなくバルトを取ろう、聖書学を捨てるというわけではないのですが、教義学の方により大きな魅力を感じて、そちらの方で牧師としての生活を始めることになりました。

瀧澤先生からの問いかけに対して、バルトはそれを決して受け入れませんでした。なぜでしょうか。バルト自身はそれについて公けにほとんど語っておりませんので、わかりませんが、ゴルヴィッツァーなどバルトの弟子たちの発言から推定して、私自身はおそらく次のようなことではないかと思うのです。つまり、瀧澤先生の問いかけというのは、キリスト教の伝統的な言葉でいうと、「偶像礼拝の禁止」ということと関わっています。偶像礼拝というのは、本当の神様に代えて、人間が自分で刻んだ像を拝んだり、あるいはアドルフ・ヒトラーのような人間を神のごとく称えて、つまり人間とそれが作り出した偶像 *idola* を神の代わりにして、それに従って行こうとすることを意味します。

カール・バルトはこの偶像礼拝と徹底的に戦った神学者でした。ナチズムはもとより、一見それとは正反対に見える神学的自由主義とも（両者ともバルトによれば根っ子は19世紀の人間中心主義にあって同じです）、また比較的穏健なエミル・ブルナーの自然神学とさえも、バルトは厳しく戦いました。それは、人間的自由であれ、民族主義であれ、自然に内在する神の痕跡であれ、神ならざるものを神にするという「偶像礼拝」に対する断乎たる「否」(Nein!)であったのです³⁾。

瀧澤先生はこのバルトの線に立ちつつ、それを更にもう一步すすめようとされたのだと思います。それが、第一義のインマヌエルと第二義のインマヌエルを厳密に区別すべきだという主張でした。たといイエス・キリスト御自身であろうと、この私たちの歴史の内部に現れた神様のひとつの顕現形態を、

2) Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, I-IIae, q.72, 5 ; q. 75, 1.

3) Karl Barth, *Nein! Antwort an Emil Brunner*, in : *Theologische Existenz Heute*, Heft 14, 1934.

その根源にある神様ご自身、原事実 (Urfakt) そのものと混同して、両者を同一視するならば、私たちは再びあの偶像礼拝に陥り、そこから再びキリスト教を絶対化して、他の宗教や思想に対して、あるいは聖書の歴史的研究に対してさえも、開かれた自由な態度を取ることができなくなる。それが瀧澤先生が言われた、「バルト神学になお残るただ一つの疑問」⁴⁾ではなかったでしょうか。

しかしバルトの立場から見ると、瀧澤先生が主張されるこの「原事実」というものも、もしそれが聖書とその歴史、イエス・キリストという神ご自身の啓示を相対化するならば、それは結局東洋の一哲学者が考えた抽象的・形而上学的な神概念に過ぎず、それ自体が別の偶像を作り出すことになるのではないかと、という疑問を払拭できません。聖書の証しするイエス・キリストにあくまでこだわりつづけなければ、つまりあの人間イエスを絶対化するのはないけれどもあのイエスのまさにその中に神様ご自身の姿 *imago* を見るということでなければ、私たちは唯一の確かな根拠を失うのではないのでしょうか。そして悪くするとその喪失感を、手当たり次第に色んなこの世的な事物や宗教に飛びついて埋めようとするのではないのでしょうか。つまりは瀧澤先生の「原事実」なるものも、悪くするとグノーシス的な抽象的神概念を生み出すことにつながるのではないのでしょうか。

要するに私には、瀧澤先生のご批判は、バルト神学に対する批判的問いかけとしては十分有効なのですが、逆に瀧澤先生の思想の方にもある種の脆弱性・危険が潜んでいて、ちょうどバルトの亜流であるバルト正統主義といえますか、バルティアンが危険なものであるように、瀧澤の亜流・瀧澤主義というものも、抽象的な神概念に接近する危険なものではないかと思えたのです。

神学部卒業当時、私はここまではっきりと考えたわけではなかったのですが、とにかく自分にとって確かなことは、これから牧師として毎週、説教をしてゆかねばならないということでした。そして牧師として聖書を読み、聖書から学び、聖書について教会で説教をしてゆくためには、バルトに導かれ

て聖書を学んだ方がよいように思えたのです。福音書のイエス・キリストにどこまでも信頼を寄せることなしには、教会の講壇に立って説教をし続けることは不可能です。特に私たちは自然の傾きとしていつでも、神様の言葉ではなく、それに代えて自分の言葉を語ってしまう傾向がありますから、つまり自分の偶像を作り上げてしまう危険がいつもありますから、その点について厳しいバルトの言葉を学びつづけることが大事だと思いました。瀧澤先生ご自身が、あるとき、名島のご自宅にお訪ねしたときだと思いますが、バルトの教会教義学はそれ自体が説教だ、とおっしゃったのを覚えているのですが、確かにバルト神学は、ある意味ではそれ自体がひとつの説教のようなものでありますので⁵⁾、バルトを学び続けるかぎり、説教の言葉にも困らないように思えました。そこで私は、瀧澤先生の問いかけを忘れたわけではなかったのですが、説教で生きる牧師としては、ここはバルトで行こうと思いました。

4. バルトと歴史

瀧澤とバルトの問題については、その後も私の中では決着がつかないままになっています。カール・バルトの神学には、その後も様々な批判が投げかけられてきました。その批判のひとつは、バルトの歴史概念を問うものです。バルトは歴史のイエス・キリストを大事にするのですが、それにしても史的イエスの研究については冷淡ではないか、というのです。われわれは様々な限界はありつつも、歴史学的方法論によってイエスとその時代、原始キリスト教の形態やその *motivation* などを分析するということをしていかなければ、歴史のイエス・キリストも鮮明にはならないのではないかと。つまり、バルトは歴史を大事にすると言うにしても、実は十分歴史ではないのではないかと、という批判があります。これは主にパネンベルクによってなされた批判なのですが、それによるとバルトのいう歴史というのは、歴史というより

5) バルト『教会教義学』の第一巻 (KD I/1, I/2, Die Lehre vom Wort Gottes) は、そのままひとつの説教論として読むことができる。

4) 瀧澤克己『カール・バルト研究』創言社

も原歴史 Urgeschichte であって、バルトは歴史的・批判的研究から救済史を守るために、この原歴史という安全な港に逃避したというのです。そしてその結果として、バルト神学は、彼自身が否定したはずの主観主義の最も先鋭な現われになってしまった、というのです⁶⁾。

もうひとつの批判は、ある意味ではこれとは逆に、バルトは歴史のイエスを大事にするがゆえに、イエスの歴史の枠としてのイスラエルの歴史を、特別な歴史として大事にしすぎるという批判です。バルトは単にイエス・キリストの三十年の生涯の歴史のみならず、その枠としてのイスラエルの歴史をも、神の啓示の歴史として、他の一般的な歴史とは区別します。イエス・キリストの神は、第一義的にはイスラエルの神なのであり、今もイスラエルの神であり続けています。それゆえバルト神学は、必然的にユダヤ人と連帯する神学でありました。「救いはユダヤ人から来る」(Jn. 4, 22) という聖書の御言葉は、2000年前にそうだったというだけでなく、今でも有効である、とバルトは考えていました⁷⁾。

このバルト神学のありようは、第二次世界大戦中に、ナチスによるユダヤ人迫害が猛威をふるったときに、教会がユダヤ人を救援する活動をしてゆく根拠になりましたし、戦後も教会とユダヤ教との連帯を推し進めてゆく力になりました。その重要さはいくら強調しても強調しすぎることはありません。けれども、1948年にユダヤ人が自らのイスラエル国家を持ち、その後の歴史の中で、彼らもまた国家の論理で他の民族を圧迫したり虐殺したりもするという、ありうべからざる事態を迎えた今、果たしてバルトのいわゆるイスラエル神学はそのままいいのか、という問いかけが起こって来るのです。ユダヤ人が国家を持たない民族として、国家に対するすどい批判であった時代には、あまり問題にならなかった事柄が、今、問題になっているのです。

これらの批判に対して、バルトの立場から答えることもできると思います。二つの批判は、一見正反対のように見えますが、その根っ子にあるのは一つ

6) Wolfhart Pannenberg, Heilsgeschehen und Geschichte, in: Grundfragen Systematischer Theologie, Vandenhoeck 1979³, S. 22.

7) Eberhard Busch, Unter dem Bogen des einen Bundes, Karl Barth und die Juden 1933-1945, Neukirchener 1996, S. 375 f.

の批判です。それは結局、聖書の歴史と普遍的な歴史の関係を問う問いであり、イスラエルの神と全人類の普遍的な神を問う問いです。バルトにおいては、神様とは第一義的にはイスラエルの神、イエス・キリストの神であり、この狭い隘路を通過のみ、諸民族の神、全人類の神であるのです。瀧澤先生のバルト理解もバルト批判も、まさにこの一点に向けられており、その点で、今日でもいささかも色褪せることのない、本質的な問いでありつづけているように思います。

5. トマス・アキナスとの出会い

13世紀の神学者、スコラ学者であったトマス・アキナスと私が出会ったのは、神学部を卒業して、牧師として働きながら九州大学の大学院で学び始めてからです。稲垣良典先生を通して、私はトマスに出会いました。私のトマス理解は、ほぼ全面的に稲垣先生に依存しておりますので、その意味では私の講演題名は「瀧澤・バルト・稲垣」にすべきか、それとも思い切って「瀧澤・寺園・稲垣」にすべきなのかもわかりませんけれども…。稲垣先生から学んだトマスの神学体系は、バルトのそれと比べると足る壮大な体系だと思うのです。そして実際、両者はある意味でカトリックの神学とプロテスタントの神学を代表しているものと見られて、比較されることがよくあります。最初私は、トマスはほんの教養程度に知っておこうという気持ちだったのですが、学んでゆくに従って次第にトマスの魅力に引かれていきました。

今から考えると、トマスの神学がバルトと違う一番大きな点は……これは私の受けた印象だけを言うのですが……トマスの神様は自己主張しない神様だということなのです。バルトの神様はよく語る。それはまるで私たちプロテスタントの牧師のように、よく語るのです。ご自分について、世界について。ところがトマスの神様は、トマスの探求のいつも目標として、彼の探求を導いておられるのですが、神様ご自身が舞台に登場して語るということはほとんどない。まあこれは Otto Hermann Pesch という人が書いているのですが、マルチン・ルターはトマスのことを評して、「おしゃべりなやつ」

loquacissimus (Schwatzmaul) だと言ったそうなのですが⁸⁾、私の印象は違うのです。トマスはむしろ非常に寡黙な感じがした。トマスが、というよりもトマスの神様が、とても静かな印象だった。トマスもまた、バルトと同じように、神様を知ることができる、そして神様を知ることができない、という緊張関係の中で語りつづけます。私たちは神様について何を知ることができるのか、そして何については知りえないのか。知りうることについては明瞭に語る。そして知りえないことについては沈黙しなければならない——ヴィトゲンシュタインがそんなことを言ったというのですが⁹⁾、彼より700年も前に、トマスはそれを実践しているのです。

トマスの神学を一言で語るのは困難ですが、あえて言えば、それは二つの要素から成立していると思います。ひとつは存在論の神学です。存在するということが、そのことをトマスはいろんな仕方で探求していて、「存在」の展開が神様の創造であり、人間の生命であり、また人間が神様へと帰るということ、つまり救済でもあります。もうひとつの要素は、知性の意味です。「知る」ということ、それはいつも「愛する」ということと不可分に結びついていのですが、この「知る」ということの展開が、さきほどの「存在」とからみあいながら、ずっと展開していく。それがたとえば三位一体論であり、人間の知性の問題、あるいは倫理の問題、そして救済者キリストの問題へと展開している。これもまた壮大な体系で、もしかするとこれは究極の哲学、究極の神学かもしれない、と私は考えることがあります。

6. トマスとバルト

バルトとトマスに出会って、そしてその両者をつなぐ一本の線を引きたいというのが、私の長年の願いなのです。両者の違いを言うのは簡単ですし、それはこれまでも多くの人々に指摘されています。バルト自身がその著作

の多くの箇所でもトマスについて述べておりますが、それらは、トマスから多くを学びつつも、全体としては批判的であります。トマスの思想をバルトは *analogia entis* という標語で理解しており、それに対して自分は *analogia fidei* あるいは *analogia relationis* でやるんだ、と宣言しているところもあります¹⁰⁾。ですから、両者の違いを際立たせるのは、比較的簡単なのですが、この二人の神学をつなぐもの、つまりトマスもバルトも、確かに二人とも神学者だと言える、二人が対象としているのは別々の神様ではなくて、同じ一人の神様であるということ、それを正確に述べることは難しいのです。もちろん、その神様は同じ神様だというのは、神学の前提であって、それがなければ対話は成り立たないのですが、両者の神学を個々の主題について比較していくと、違いばかりが際立ってきて、結局神様のイメージをそれぞれ勝手に作ったんじゃないのか、と……実際に私はある牧師からそう問われたことがあるのですが……言われかねないのです。

しかし、トマスとバルトを結ぶ一本の線は確かにある、と私は思ってきました。そうでなければ、神学という学問はなりたたない。そしてその線というのは、トマスとバルトの違いそのものが、むしろ彼らが同じひとつの関心事を共有していたということのしるしであることになる、そのような線でなければならないと思うのです。つまりそれは、ある意味では時代の違いということなのです。ちょうど、同じひとつのものを、昼の光の下で見ると、夜の人工的な光の下で見ると、全然違った色に見えるように、私たちがトマスとバルトは違うと思っている、まさにその点で二人は同じであるものかもしれない。そして、この光の違い、中世と現代という時代の違いを生み出したのが、あるいはその時代の違いの端的な現れが、稲垣先生の言われる「中世後期における靈魂論の崩壊」あるいは「形而上学の崩壊」¹¹⁾という事態であったと思うのです。

トマスにおいては、神学とは形而上学と神の啓示の緊張関係の中で行われる対話でありました。形而上学は彼においては、単なる理論学、理念の学で

8) Otto Hermann Pesch, Thomas von Aquin, Grenze und Größe mittelalterlicher Theologie, Grünewald 1988, S. 19.

9) Wittgenstein, Logisch-philosophische Abhandlungen, 1921.

10) Barth, KD I/1, Vorwort VIII f. ; 257 f.

11) 稲垣良典『抽象と直感——中世後期認識理論の研究——』創文社 1990 年。

はなく、経験に基づき、経験の意味を明らかにするものだったと思います。これに対して、創造、キリスト、救済などのキリスト教の教えが、知性の探求の目標であり意味であり対象である神の秘義として関わってきます。三位一体論は、トマスにおいては知性論でもあり、救済論でもあるのです。トマスは形而上学を支えられ、キリスト教の教えに導かれつつ、彼の神学をすすめていきました。

形而上学が崩壊すると、事態はどうなるのでしょうか。それについて語る力は私にはありませんが、ひとつだけ考えていることを述べさせていただきます。

7. 神の遠さ

中世後期の神学者たちにとって、神様はとても遠い存在だったと思います。この世界とは断絶して、この世界を無限に超越しておられる神。この神の超越的側面が非常に強調されてゆきます。神はそこいらの自然の中には内在しない。そのような神様こそ、後期中世の人々にとっては偉大な神様でした。トマスにおいてある意味で両立していた神の超越と内在は、経験から導き出される意味での形而上学が喪失するに従い、はっきり分離してきたのだと思います。天と地が離れるように、神と世界は切り離されます。そしてそれが限界に達すると、逆に天と地を電撃のように結びつけようとする神学・哲学が出現してきます。マルチン・ルター（彼の生涯はそもそも雷の経験からはじまったのです）がそうです。自然と神との対立状況の中で、自分は神様に従うと宣言する人々の出現です。ルターの思想を最も先鋭化したのはヘーゲルではなかったでしょうか。

その場合、近代の人々が神と人間の接点として選んだのは、自分自身でした。自己自身において、その理性の働きにおいて、その信仰において、自己の主観性において、神と人はひとつになります。近代の人間にとって、神とは世界に内在する存在そのものであるよりも、世界とは対立するような絶対的な主観性だったのです。神と世界が、換言すれば神の超越と内在がひと

つに溶け合う場所、それが自己自身だとすると、近代の人間はすべて、いわば自己自身に酔っています。いわば小さな神として、世界に対峙しています。（「ついに見つかったよ。／なにながさ？ 永遠というもの。／日没と溶けて／去ってしまった海だ。」¹²⁾）神人の一体を自己において実現することを神秘主義だとすると、近代をリードした思想の多くは、根本的にいって神秘主義的だということができます。

カール・バルトの神学の意味は、この神と人の一つになった場所を、自己自身の主観性ではなく、イエス・キリストという人、その人格 (Person) に置いたことだと思われまます。それによって彼の神学は、主観主義の先鋭な現れではなく、ある意味での客観性を得たこととなります。バルト神学は「啓示の客観主義」あるいは「啓示の実証主義」と呼ばれます。しかしそれは、主観主義と対立したような客観主義ではなく、主観客観の対立を越えた「場所」を発見したように見えることも確かでありまして、そのため、西田哲学の側から瀧澤先生のようにバルトを高く評価する人々も出ました。しかしバルト神学は、「主観・客観図式の止揚」という近代的問題設定の枠組みよりももっと長い神学の歴史の中で、基本的に評価されねばならないと思います。

8. 神学の可能性

形而上学の崩壊という新しい光の中でバルトの神学を見ると、それがトマスの神学と基本的に同じ動機を持っていることが見えて来ないでしょうか。つまりそれは、神秘主義に陥ることなく、また神秘を否定することなく、大いなる神秘に導かれつつ神について語る可能性です。そこでは、神について語ることで、人間を新しく発見することにもなり、世界を発見することにもなります。人間の自画像ではないような神、われわれにとって永遠に新しい、対話の相手、探求の相手としての神。バルトにとっては、神学はこの世界の状況とイエス・キリストとの対話でしたが、トマスにおいては、神学は、形而上学と神の啓示の対話でありました。

12) アルチュール・ランボー「永遠」(『ランボオ詩集』角川文庫 100 頁)。

カール・バルトの神学は、私に説教者としての実存を与えてくれたのですが、トマス・アキナスの神学は、神学研究に携わる者としての広い枠組みを与えてくれます。古代から現代まで、世々の神学者たちが聖書という共通の源泉を読み、それと対話しながら築き上げた、開かれた広場 forum あるいは大学のようなものがあります。それが「神学」という学問ではないか、と私は思うのです。トマスやバルトは、あるいは瀧澤先生や稲垣先生も、その言葉による闘技場のプレイヤーであります。私はとるにたりない者ですが、それでもそこでの議論や対話を自由に観戦することができますし、時々はおずおずと手を上げて、大先生方に質問することも許されています。ビデオを見ながら今のところをスローモーションでもう一度、と自分で研究してみることもできます。この広場においては、すべての者が参加者であって、単なる観客はありえないからです。

瀧澤先生、カール・バルト、トマス・アキナスに導かれて、私はキリスト教神学の世界を垣間見てきました。今日はそのささやかな報告とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

